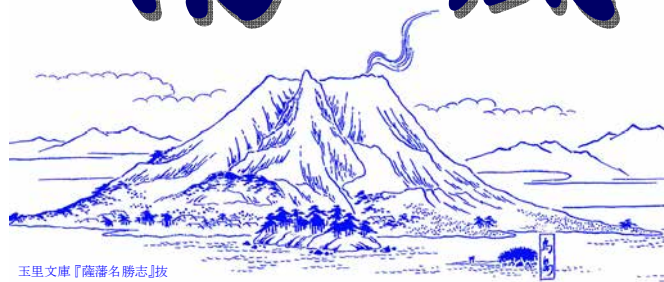


# 南風

鹿児島大学図書館報 第62号

NAMPU:Kagoshima University Library Bulletin No. 62



玉里文庫『薩藩名勝志』抜



玉里文庫『西洋諸鳥図譜』抜



## 目次

寄り道	原田 秀逸	2
マトリックスについて	坂田 泰造	4
東ローマ帝国の農業書『ゲオーポニカ』国内唯一の稀覯本を発見		6
附属図書館所蔵の <i>Geoponika (Geoponica)</i>	伊藤 正	7
ゲオーポニカ(ビザンチン時代の農業書)と魚醤	田口 一夫	11
平成17年度貴重書公開 「海が運んだ中世かごしまー陶磁器・中国銭・書籍が語る東アジア文明ー」展 開催報告	木場 隆司	15
平成17年度貴重書公開記念講演会講演要旨		
中世東アジアにおける銭貨流通	太田 由紀夫	16
南九州と中世・近世文学	丹羽 謙治	17
島津荘と日宋貿易ー志布志・隼人・金峰町域を中心にー	日隈 正守	18
「本はいのち！」	森園 壽	20
研修報告:平成18年度 総合目録データベース実務研修	宮里 昌代	20
本学関係者著作寄贈図書		21
夏休み子ども見学デー開催		24

ニュース&トピックス ①  
オンラインクエストサービス  
世界の新聞オンデマンド印刷  
簡易印刷製本」サービス P.14

ニュース&トピックス ②  
鹿児島大学教員著作  
コーナー P.19

ニュース&トピックス ③  
新入生対象  
「図書館ガイダンス」 P.24

## 寄 り 道

桜ヶ丘分館長 原田 秀逸



小学生の頃の昭和30年代前半は、日本はまだ本格的な高度経済成長時代に突入する前で、戦後10年以上経っているのにまだ戦争の傷跡があちこちに残り、そして全てが貧しかった。まさに小栗康平監督

のデビュー作「泥の河」(1981、宮本輝原作)の風景だった。小学校には十分な予算が無かったのだろう、図書室も興味をそそるような新しい本の記憶も何も残っていない。テレビも無く子供の知的好奇心を満たしてくれるものと言えば夕方のラジオ連続ドラマや定期的に届く「ラング世界童話全集」(ポプラ社)で、楽しみが他にないことが却って活字に対する貪欲さを涵養してくれたと思う。この童話全集は十数巻のそれぞれに「みずいろの童話集」「くさいろの童話集」のように色の名前の題名が付けられ、題名に沿った鮮やかな色の表紙も素敵だった。この文を書き始めるまでは気付かなかったのだが、実は、川端康成、野上彰の文豪の手による格調高い全集であったこと、復刻版も出ていることを、最近インターネットで知ったばかりである。

小学校高学年になると、日本文学全集(出版社不明)や世界文学全集(河出書房)など、父の趣味で家に飾ってあったシリーズものの中から面白そうな本を時々開いたりしていた。夏目漱石や芥川竜之介などの作品は面白かったが、旧漢字旧仮名遣いの羅列だったりルビがふってあったり、読みにくいことこの上なかった。この頃は、毎月届く「子供の科学」(誠文堂新光社)を楽しみにしていた。この月刊誌は大正13年の創刊で80年経た現在も発行されている驚くほど息の長い雑誌である。同じ年に「無線と実験」、昭和23年に「初歩のラジオ」、昭和39年に「電子展望」など馴染みの深い雑誌が同社から創刊されている他、スポーツ、園芸・盆栽、天文、ペット、囲碁などなど、多彩なジャンルの趣味の月刊誌がこの出版社から世に送り出されている。科学雑誌と同じように、鉄人28号や探偵ビリーパックなどの連載されている漫画も面白かったが、漫画は家ではご法度で、友達から借りて来ても怒られ、その結果漫画に対する好ましくない評価がすり込まれてしまった。その後遺症で、ちばてつやの作品は好きだけれども、今で

もお金を出して漫画雑誌を買う事はないし、電車の中などで若い人が漫画本を大っぴらに読んでいる姿に違和感を抱いてしまう。漫画喫茶などという商売も成り立っているのだし、mangaが世界共通語になったらいいし、時の外務大臣が愛読書「ゴルゴ13」(さいとうたかお)など漫画ファンであることを公言して憚らないのを見て羨ましくも思い、自分が全く古くさい人間であることは違いないと思う。ただ、一般の図書館に漫画は置かれていないようなので、漫画の地位が確立しているというわけではないようだ。

図書館を本格的に利用するようになったきっかけは、小学5年生のクラス替えで、クラスメートの川崎君という新しい友人ができたことにある。ある日、彼が読んでいた風変わりな本から、彼が学校の帰り道に市立図書館に通っていることを知って、早速、一緒に通うことにした。図書館は学校からは私の家とは正反対の方角の繁華街の裏通りにあり、学校から歩いて30分、帰りに図書館から自宅までは小1時間かかったが、図書館通いはそれなりに楽しかった。というのは、途中の模型屋さんに大きな手作りの飛行機や列車、船の模型が飾ってあったり、獅子肉専門店のショーウインドウに毛むくじらの巨大なイノシシが逆さにぶら下げてあったり、道草しながら世の中を眺めて歩くといろいろな発見があったからである。その頃に比べれば、昨今の子供を狙った卑劣な犯罪の多発のせいで、放課後学校で遊ぶことも、道草も食えなくなった今の子供たちの生活は、きっと楽しくないだろうと思う。

件の市立図書館は、せいぜい50人収容の教室位の部屋がいくつかある程度の、あまり大きくない古いコンクリートの2、3階建てで、恐らく空襲にも焼け残ったのだろう。閲覧室には古めかしい木製の大きなテーブルが何台か置いてあり、いつも少なくとも大人達が静かに本を読んでいた。当時の失業率は1.5%を超えていないので図書館に暇つぶしで訪れているというような背景があったのではないようだ。面白そうな本を探しては2時間ほど読んで過ごし、読み残しの部分は借りて家で読んだ。図書館の蔵書の数は決して多くはなかったが、それまで接することのなかったジャンルの本を手にすることができた。特に鮮明に覚えているのは、帝銀事件(昭和23年)、下山総裁事件(昭和24年)、三鷹事件(昭和24年)、松川事件(昭和24年)など今でも話題にのぼる大

事件や、修学旅行生が多数犠牲になった国鉄宇高連絡線「紫雲丸」事故(昭和30年)、青函連絡船「洞爺丸」沈没事故(昭和29年)などルポルタージュ本である。全く別世界の衝撃的な事件に圧倒されたが、勿論その背景など理解するには幼すぎた。そんな図書館への寄り道も、興味のある本がなくなったのか、図書館が遠すぎたのか、次第に足が遠のいていった。

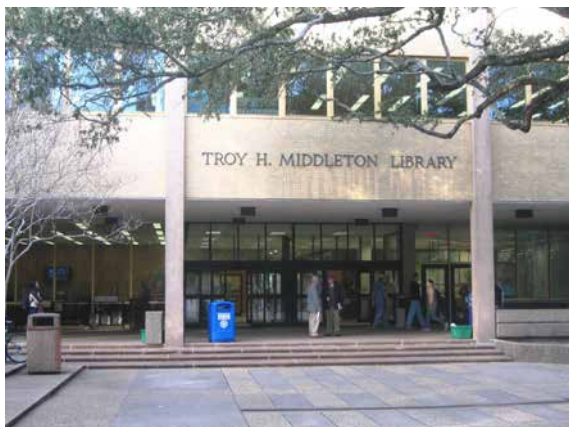
中学に入って物静かな司書のお姉さんがいる薄暗い図書館に足を運んだけれども、面白い本に出会った記憶はない。それからは、専ら古本屋で1冊100円以下の文庫本や新書などを買って読むようになった。本屋はたくさんあったから、はしごして新刊本を少しずつ立ち読みして読み切ってしまう方法も習得した。再び図書館を本格的に利用するようになったのは大学に就職してからである。研究に必須の論文収集である。つい10年位前までは、文献の取り寄せには学内の図書館を経由して3ヶ月位は余裕を見ておかねばならなかったが、最近では電子ジャーナル化が急速に進んだ結果、数日かければ必要な論文がほとんど揃ってしまう。何よりも自分の机の上で論文をpdfでダウンロードして必要な部分をチェックしながら論文を書き進めることができるのはまことに便利で有り難い。

ところで、最近、図書館利用者のマナーの悪化が取り沙汰されている。本に鉛筆で線を引くなど当たり前、ボールペンで引く輩もいるという。それどころか、何ページも切り取られることも珍しくなく、当然ながらそういう本は廃棄せざるを得ない。盗まれる本も後を絶たない。こういう問題が大学の図書館でも起こっているから驚きだ。個人的にも、私の研究室までわざわざ質問に来てくれる学生は勉強熱心な学生と思うから、私費で買った高価な専門書も貸してさしあげたのだが返してくれず、結局確証がないので諦めたことがある。図書館に限らず、本

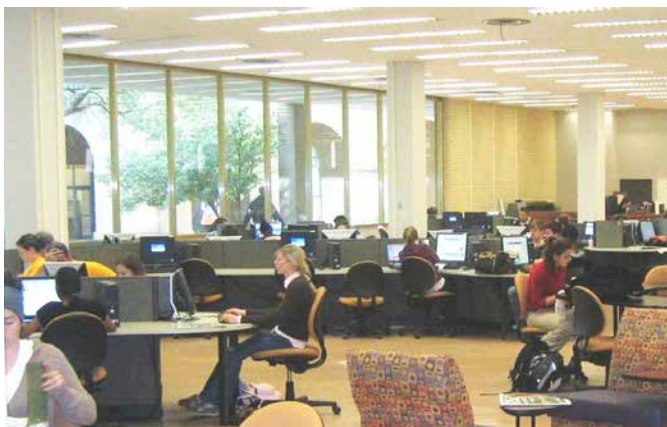
屋で売り物の本のページに折り目を入れたり、目的のページを携帯電話で写真に撮り、注意されると何が悪いのだと開き直る輩もいるという。買うお金が無いのではなく他に買いたいものがあるから勿体ないというのが理由なのだそう。モラルの問題ではなく、既に犯罪のレベルである。世の中、物も情報も溢れているけれども、はたして本当に豊かになったのだろうか。しかし、なんでこんなになっちゃまったのかと悲憤慨嘆しても仕方がないのだろう。それに、最近ほとんどの新刊本はインターネットの通販を利用すれば、ほぼ1週間以内に宅配便で手元に届く。書籍の入手方法も利用方法も大きく変わりつつあり、こういう問題も変貌していくに違いない。

30年前、マイクロコンピューターが世に出始めた頃、まだキットではあったが将来これが一般に普及するだろうと皆に言い回って、そんな馬鹿など笑われた。15年前、インターネットが普及すると確信した。10年前、学術雑誌がこれほどまでに急速に電子化することを予測できなかった。既に音楽の世界ではデジタル化された曲の販売が一般化している。また、プロの評論家の活動の舞台はインターネット上に移っている。これらを踏まえて想像するに、今後webベースの電子出版が主流になり、どんどんpdf化され紙の書籍の需要は激減するだろう。15年前のアメリカの大学図書館の閲覧室は、昔からの机と椅子だけの自習室の雰囲気だったけれども、最近ニュースで垣間見たUCLAの図書館内は、どの机にもノートパソコンが置かれていた。日本も、大学、公立を問わず図書館の電子化がさらに進むだろうし、それに伴って図書館の形態も機能も変わって行くだろう。既に変革は始まっている。(2006.11.28)

(はらだ しゅういつ: 医歯学総合研究科 教授)



ルイジアナ州立大学中央図書館



ルイジアナ州立大学中央図書館閲覧室 (12月6日撮影)

## マトリックスについて

水産学部分館長 坂田 泰造



マトリックス(matrix)は広範囲に使われている興味深い言葉である。早速、中央図書館にあるオックスフォード英語辞書(The Oxford English Dictionary)の関連ページを開いてみると、もともとラテン語の「子宮」を意味する言葉であると解説されている。そしてこれも母<Mater>から派生したものである。その下にはmatron (女史、婦長)という単語も見られる。本来的にはそこから「何かを生み出すもの」を指す言葉であるが、非常に広範囲に「生み出す機能」を有するものに適用されている。

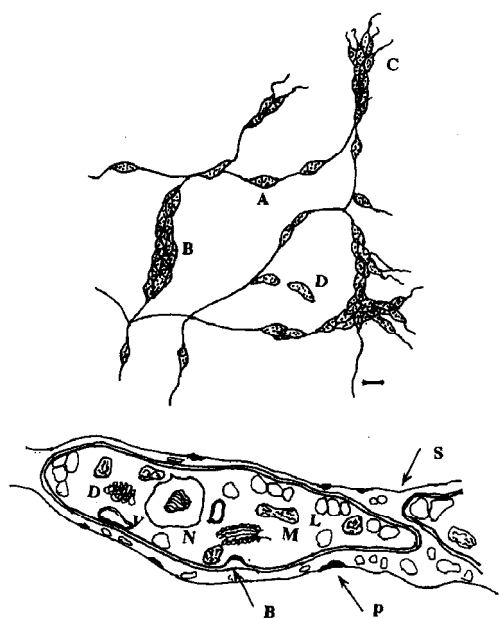
第一に解剖学では子宮(uterus or womb)を意味する単語として使われている。そこで新しい生命が育まれる場所である。最近、ウォシャウスキー監督(キアヌ・リーブス主演)の「The Matrix」というSF映画が評判になった。22世紀末に人間とロボットの間で壮絶な闘争が繰り広げられ、ついに人間は人工知能ロボットが構築したロボット(人)造の子宮システム(Matrix)の中で栽培(飼育)されることになる。そのシステムは人間の体から出る生体電気エネルギーを膨大な熱量に変換し、そこから必要なパワーを生産している。その代わりに人間にはコンピュータのプログラミングに従って神経相互作用が作り出すバーチャル(虚像)世界が与えられる。人間の実体はMatrixの中にあるが、意識はバーチャルの中で一生を終えることになる、といった奇想天外の物語である。しかし、集団マインドコントロールでは「1984」(ジョージ・オーウェルの作品)の様な世界が出現し、単なる絵空事とは言えなくなることは肝に銘じるべきであろう。この作品はSFであるだけに、Matrixという概念を巧みに利用しているところが出色であった。さらにコンピュータで作られ出される仮想現実空間も「The Matrix」の一部となっている。中国の故事に「邯鄲の夢」の物語があるが、人

の一生は一瞬の夢幻のうちに終わるものと考え、我々の一生も仮想現実と思えなくはない。しかし人間は自分の人生を必要以上に悲観的にも楽観的にも考えることなく、現実を見据えて有意義に過ごすべきことを教えている。

子宮のように、ある場所(空間)を占めているもの(something)の中から新しい他のもの(something)を生みだし発達させる力がある場合に基の媒体になるものをmatrixと規定するようになったと考えられる。そこから「生み出す機能」に着目する場合と「子宮状の形状」に着目する場合に分かれて来た。例えば、動物の爪、歯、毛髪が伸びてくる根本の組織、カビや苔が付着しそれらの成長を支持する基盤などは前者であり、鉱物を構成する大きな粒子を取り囲む微細な結晶構造、粘土やプラスチックなどからレプリカを造る場合の鋳型、あるいは数学における縦横に配置され子宮状の記号で表現される「行列」は後者に当たる。しかし鋳型や行列は単に形状だけでなく、そこから「新しいものを生産する機能」にも意義が認められる。

生物学では広く細胞と細胞の間を満たす細胞外間質(ゲル)や基質もmatrixと呼ばれている。細胞によって生産された物質であるが、細胞外の空間を埋め尽くして、細胞が成長したり接着する場合の足場(ベッド)になったり、細胞に必要な物質を細胞に分配したりする機能を有している。従って動物の場合の軟骨やコラーゲン、植物の場合のセルロースなどもマトリックスの一種と言える。さらにマトリックスは細胞の内部にも存在する。細胞の内部に存在する細胞小器官の一つであるミトコンドリアは、太古の昔に好気性細菌が共生(寄生)したものと考えられている(女性生物学者、リン・マーギュリスの説)。SF作家、瀬名秀明が大学院生時代に発表した小説「パラサイト・イヴ」(寄生したイヴの子孫という意味)で一般の人にもおなじみになった名前である。ミトコンドリアの内部には襞状の膜が発達しており、その間隙は基質(matrix)が充満して

いる。基質の中には種々の酵素が含まれていて重要な代謝反応が行われており、ミトコンドリアのなかで生命活動に必要なエネルギーが間断なく生産されている。ミトコンドリアは細菌が寄生したものの子孫であるので、それ自身の遺伝子DNAを保有している。「利己的な遺伝子」(リチャード・ドーキンスの著作)の考えに立てば、ミトコンドリア自身が自分の遺伝子を宿主の細胞核に組み込むことによって、宿主細胞の遺伝情報、さらにそれらの行動をコントロールすることもあり得ることになる。ミトコンドリアは精子や卵子にも存在するが、両者が受精する時には精子の中のミトコンドリアは分解され卵子の中のミトコンドリアだけが受精卵に伝達される(母性遺伝)。ヒトのミトコンドリア遺伝子は母系にだけ受け継がれて行くので、これをどこまでもたどって行くと、人類の起源はアフリカの一人の女性に由来するという「ミトコンドリア・イヴ説」が提唱された。最近、ミトコンドリアに細胞を生かす機能(エネルギー生産)と細胞を殺す機能(アポトーシス、プログラム細胞死)をコントロールする役割があることがわかってきた。ミトコンドリアはまだまだミステリーに満ちており、内部にあるマトリックスの中に秘密を解く鍵が存在するということになる。



#### <ラビリンチュラのコロニーと細胞形態>

ラビリンチュラはラビリンス<labyrinth 迷宮、迷路>から命名された不思議な原生生物で、枯葉や海草の分解などを促進している。細胞は細胞自身が分泌した網目構造(slimeway, track's, matrix)の中を滑走運動で移動する。丁度、餌を求めて迷路の中を右往左往しているように見える。(M:ミトコンドリア、S:マトリックスネットワーク)

ノーベル賞研究者の田中耕一博士が開発したMALDI法は、「マトリックス支援レーザー脱離イオン化法」のことで、タンパク質のような高分子物質の分子量や構造解析装置に応用されている。タンパク質のような高分子物質を破壊せずにイオン化することは不可能であったが、田中博士はタンパク質試料をマトリックスと呼ばれる補助剤に埋め込んでレーザー光線を照射するという画期的な方法によってタンパク質を破壊せずにイオン化することに成功した。その後、このマトリックスの材料を改良することによってタンパク質のイオン化がより効率的になって来ており、この方法ではマトリックスの存在が重要な鍵になっていることが理解されると思う。タンパク質はイオン化することによって電磁場の中で運動し、それを質量分析装置によって測定できるようになるのである。現在、MALDI法がさらに改良され、人間の病気の指標となる糖タンパク質を分析して病気の診断に応用することが考えられている。

マトリックス(matrix)の付いた用語は、マトリックス回路(電気通信)、マトリックス変換(数学)、カラーマトリックス(色行列)、マトリックス組織(社会学)など実に多彩である。しかし根底には立体構造だけでなく、「何かを生み出す機能」を有することが意識されていると考えられる。その意味において独善的に思い至ったのは、大学図書館は人類の英知の結集によって成り立っており、しかも新しい英知を生み出す基盤となる機能を担う一種の、重要なマトリックスの概念に相当するものではないかということである。そこでは仮想現実ではなく、実質的な世界を創造する人間を育てる機能が期待されている。

(さかた たいぞう:水産学部 教授)

## 東ローマ帝国の農業書『ゲオーポニカ』 国内唯一の稀観本を発見

鹿児島大学附属図書館では9月7日、10世紀の東ローマ帝国の農業書『ゲオーポニカ』の再版本(18世紀のドイツで刊行)が見つかったことを報道機関に発表、公開しました。

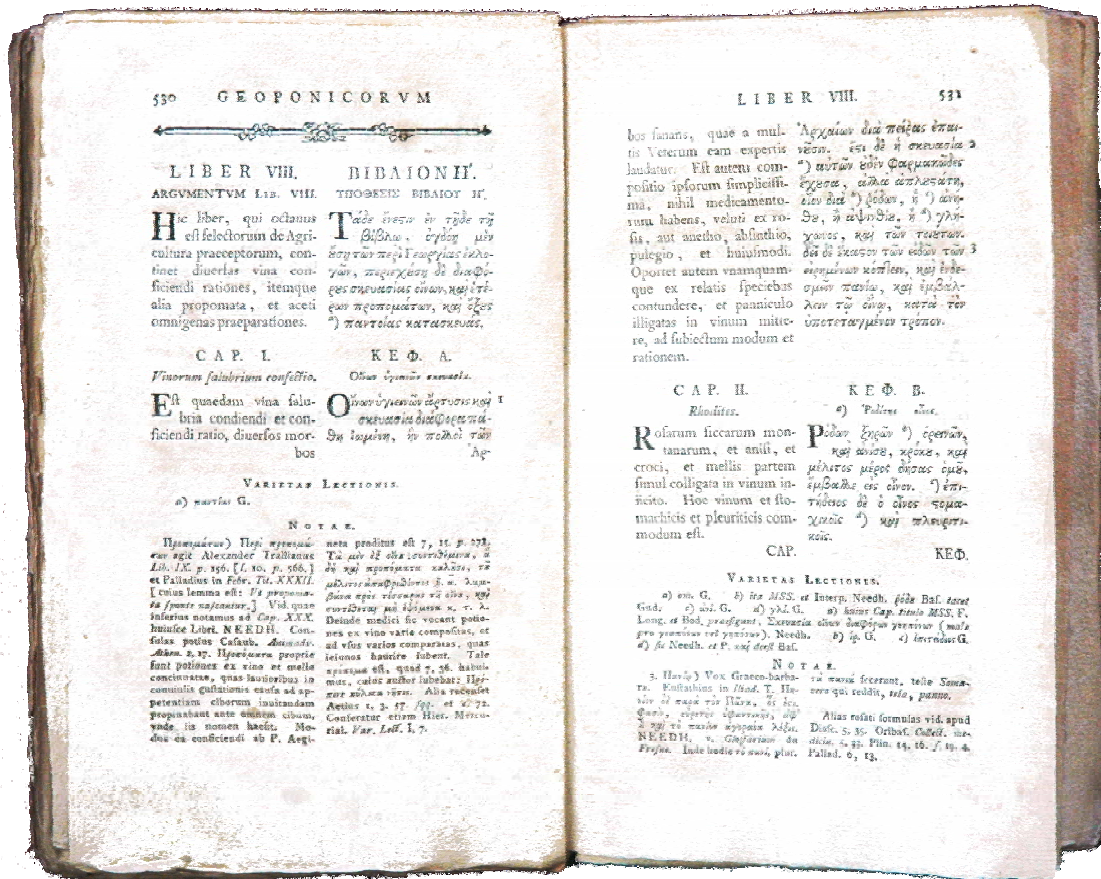
『ゲオーポニカ』は、古代ギリシア・ローマの記事を集めて、10世紀に東ローマ帝国の皇帝コンスタンティノス7世が編纂させたものです。気象、農事暦、ブドウやオリーブの栽培法、ワインの製造法、養蜂、牧畜などが記されています。今回発見した版は、1781年にドイツのライプチヒで刊行されたもので、全4冊から成り、ギリシア語の原文にラテン語の訳が付いています。

鑑定を担当した同大教育学部の伊藤正教授(西

洋古代史)によると「10世紀の原本は既に失われており、これに最も近いのが今回のNiclas版とされている。確認できるかぎり国内唯一であり、世界的にみても極めて少ない稀少本。ページ欠落等は無く保存状態も良好である。西洋古典学の研究にとって、非常に有意義な発見。」とのこと。

同書は、図書館に所蔵されている農学部前身の鹿児島高等農林学校の蔵書から見つかりましたが、1913(大正2)年に購入した記録があるものの入手経路などは不明です。

なお、伊藤教授による書誌学的論攷と田口名誉教授による関連記事を本号に掲載しています。



### 『ゲオーポニカ』第8巻冒頭の写真と翻訳

#### 第8巻 第8巻の主題

『農業に関する選集』の第8巻に当たるこの巻には、葡萄酒およびその他の食前酒のさまざまな造り方、酢のあらゆる種類が記されている。

#### 第1章 健康によい葡萄酒の造り方

1. 古代人の多くが試みてその効能を賞賛している、さまざまな病苦を癒してくれる健康によい葡萄酒

酒の調理と造り方。2. その造り方はとても簡単、薬物は一切含んでおらず、バラやインドヤニガヨモギやメグサハッカなどを用いて造られる。3. 言及されている種類の各々を砕いて、小さな布に包んで、葡萄酒の中に浸しておく、下記の方法で。

#### 第2章 バラの葡萄酒

乾燥した山バラの、アニスの、サフランの、また蜂蜜の部分を一緒に包んで、葡萄酒の中に浸しておく。この葡萄酒は胃の具合が悪い人や肋膜炎を患っている人に効能がある。

## 附属図書館所蔵の *Geoponika* (*Geoponica*)

伊藤 正

### 1. 本の構成

とびら (写真参照)

ΓΕΩΠΟΝΙΚΑ : Geoponicorum sive de re rustica libri XX / Cassiano Basso Scholastico Collectore ; antea Constantino Porphyrogenneto a quibusdam adscripti Graece et Latine; post Petri Needhami curas ad mss. fidem denvo recensenti et illustrati ab Io. Nicolao Niclas / Lipsiae : Svmto Caspari Fritsch / 1781.

体裁

4冊 (cviii+1274頁)、22cm×13 cm

1冊目のとびらに現れるタイトルは ΓΕΩΠΟΝΙΚΑ : Geoponicorum sive de re rustica libri xxであるが、2-4冊には単にGeoponicorumと当該冊所収の巻数、たとえば2冊目の場合は Geoponicorum / Tomvs II / Libros IV-VIII / continensといった具合に記され、左下にTom. IIの表記がある。4冊目最後のページの奥付はLipsiae: Ex officina Breitkopf. 1781 (ローマ数字)

1冊目: 序言 (1-6頁), I-III巻 (7-262頁)

2冊目: IV-VIII巻 (265-562頁)

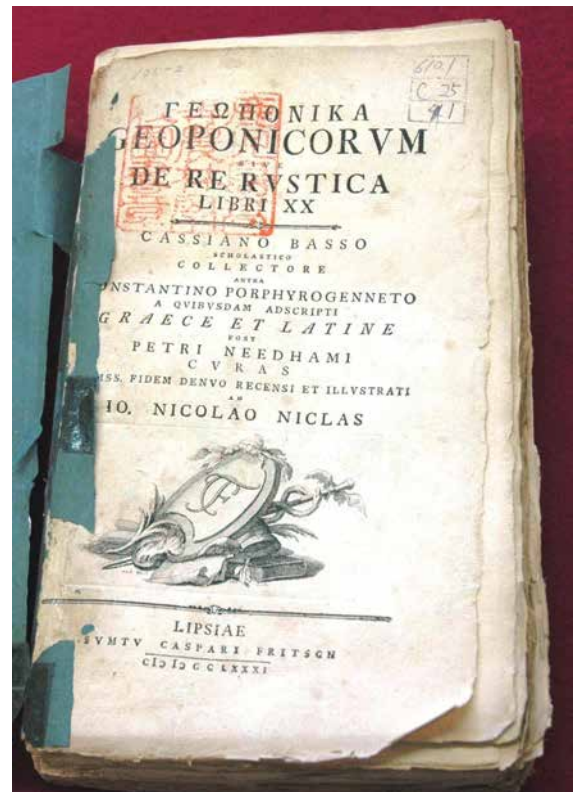
3冊目: IX-XII巻 (565-928頁)

4冊目: XIII-XX巻 (931-1274頁)

1275頁以降に複数の Index, Addendaおよび Emendandaを有す。

各巻における章・節の数およびそのページ数を示せば以下の通り。

巻	章の数	節の数	頁数
I	16	175	7-66
II	49	298	67-215
III	15	96	215-262
IV	15	98	265-309
V	53	249	310-424
VI	19	81	425-464
VII	37	152	465-529
VIII	42	65	530-562
IX	33	155	565-633
X	90	328	634-785
XI	30	100	786-837
XII	41	223	838-928
XIII	18	114	931-972
XIV	26	143	973-1034
XV	10	114	1035-1098
XVI	22	94	1099-1138
XVII	29	76	1139-1167
XVIII	21	85	1168-1206
XIX	9	62	1207-1232
XX	46	68	1233-1274



巻に当たる言葉はギリシア語のΒΙΒΛΙΟΝが用いられ、たとえば第1巻の場合、ΒΙΒΛΙΟΝ Α'の如く、ΒΙΒΛΙΟΝのあとにギリシア語数詞が用いられる。章に当たる言葉はΚΕΦΑΛΑΙΟΝが用いられているが、表記は最初の3文字のみで、ΚΕΦ.と略記されている。たとえば、ΚΕΦ. Α.の如く。ΚΕΦ.のあとにはやはりギリシア語数詞が続く。各章は一つ以上の節から成り、ギリシア語本文右側にアラビア数字1, 2, 3・・・で示されている。本文はギリシア語で左欄にラテン語の対訳を有す (各頁の右欄にギリシア語、左欄にラテン語)。

IX巻冒頭に乱丁が一箇所確認されるほか、頁数、節数に誤植、重複および脱字が数例見られる。

### 文字の特徴

στ σθ ου σχ は特殊組み文字、λλはλを重ねた特殊文字、ττ πτ κτ はあとのτを7のように記す。

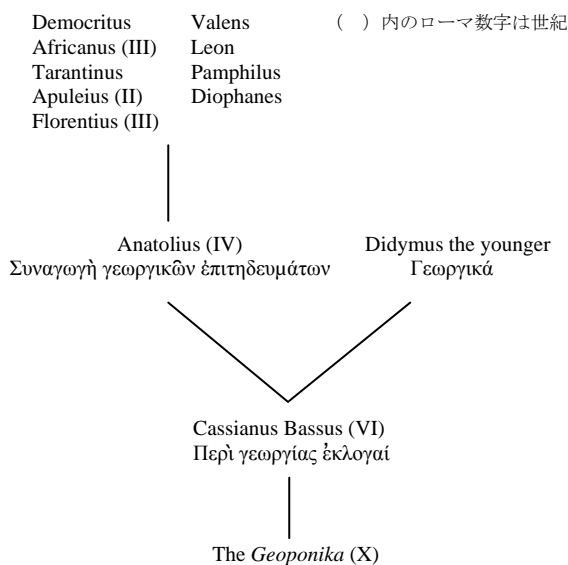
### 2. Geoponikaの意味

Geoponika (ゲオーポニカ、以下G.と略記) はギリシア語であり、γεωπονικάと綴る。この言葉はギリシア語の動詞γεωπονέω (「土地を耕す」の意)の派生語、形容詞γεωπονικός (「農業に関する」の意、中性複数形)の名詞的用法と考えられる。したがって、その意味は「農業に関するこ

と」換言すれば「農事」ということになる。この言葉が6世紀にCassianus Bassusによって編纂された農業書のタイトルとして用いられた。

### 3. Geoponikaの成立

この本のタイトルは本来περὶ γεωργίας ἐκλογαί エクロガイ『農業に関する選集』（以下『選集』と略記）であったとされる。おそらくそれは950年ころビザンツ（東ローマ）皇帝コンスタンティノス7世ポルピュロゲンネトス（在位913-959年）の命で編纂され、現在の形を取るようになった。10世紀の編纂者は6世紀の学者 Cassianus Bassus の『選集』を基にしてこれを編纂した。Cassianus Bassus はおもに4世紀の二つの農書を彼の『選集』の底本にしたとされる<sup>1</sup>。すなわち、Berytus出身の Vindanius Anatolius の12巻から成る συναγωγή γεωργικῶν ἐπιτηδευμάτων と Alexandria出身の小 Didymus の15巻から成る γεωργικά の二つ（下図参照）。



16世紀から19世紀にかけてG.の4つの再版本が確認されている。初版の Brassicanus 版 (Basileae,1539)、Needham 版 (Cantabrigiae,1704)、附属図書館所蔵の Niclas 版 (Lipsiae,1781) および Beckh 版 (Leipzig,1895)。今日一般に流布しているものは Beckh 版で、1994年に Teubner から reprint が出ている。

### 4. Geoponikaの内容

著者名・巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計	
AFRICANVS		2		1	4		5		2	13		2	3	2			2	3				39
ANATOLIVS		1			4	3	1			4	1	2	1	1					1			19
APSYRTVS																9						9
APVLEIVS		1				1	1	2	1	1		1	1									9
ARATVS	3																					3
ARISTOTELES														1								1
BERYTIVS		1		1	2		1	1		4		1	1	2				3				17
CASSIANVS					2																	2

この編纂書は20巻から成る。巻数表示のあとにその巻の主題 (ΥΠΟΘΕΣΙΣ) がくる。たとえば、第3巻の場合は、BIBAIION Γ ' / ΥΠΟΘΕΣΙΣ BIBAIIOY Γ ' 「3巻 / 3巻の主題」といった具合。ΥΠΟΘΕΣΙΣでは当該巻が『選集』の何巻に当たるか、またその巻に含まれる内容が手短かに紹介される<sup>2</sup>。全20巻は主に次の内容を有している。

- I. 気象天文
- II. 農業一般 (穀物栽培)
- III. 農事暦
- IV-V. ぶどう栽培
- VI-VIII. ぶどう酒製造
- IX. オリーブ栽培とオリーブ油製造
- X-XI. 造園
- XII. 菜園
- XIII. 害虫などの対策
- XIV. 家禽 (ハトなど) の飼育
- XV. 養蜂、蜂蜜の製造、蜂に刺されない方法と雄ミツバチの駆除
- XVI. 馬の飼育、ロバ、ラクダ
- XVII. 牛の繁殖および飼育
- XVIII. 家畜の繁殖および飼育
- XIX. 犬の飼育、野うさぎ、シカ、豚、肉の塩漬
- XX. 養魚と漁獲

G.というタイトルにもかかわらず、その内容は多岐に亘る。XIV-XIXは農業というよりも牧畜に、XXは漁業に、またX-XIIは造園に関わり、狭義の農業に関わる記述はIIに止まる。穀物栽培はぶどうおよびオリーブ栽培の影に隠れてあまり目立たない。総じて、古代世界における農耕と牧畜の一体性が感じられる。

全20巻の章の総数は621。621のうちの494の章に、章の見出しとして当該の章で引用 (抜粋) される著作名とともに属格形の著者名が併記されている。たとえば、ΚΕΦ. Α. / Περὶ ἀκρίδων. Δημοκρίτου. (1章 / デモクリトスの『イナゴについて』) といった具合。そして、以下その抜粋が続く。同じ著者が複数の章にまたがる場合は2度目からは「同著者の」(Τοῦ Αὐτοῦ)と記される。属格形の著者名が記されていない残りの各章も、当該の章で引用される著作名や当該章で扱われる内容の短い解説が見出しとして記される。章には長短があるが、見出しのない章はない。見出し中に確認される著者は32名。これらの著者が各巻にどのような頻度で現われるかを表に示すと次のようになる。



著者名・巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
DAMOGERON		2			3		2		2	4		2									15
DEMOCRITVS		2		2	5	1	4	2	2	17		1	2	2	1		2	1	2	1	47
DIDYMVS	1	8		4	3	4	2	1	7	10	3	5	2	6	3	1	2	5	2	1	70
DIONYSIVS	1																				1
DIOPHANES	2	2			4	1	2		1	4		1	1		1			1			20
FLORENTINVS	1	11		3	9	7	2	1	7	12	4	10	1	3	1		3	4	1	1	81
FRONTO							2					1							1		4
HIEROCLES																3					3
HIPPOCRATES																1					1
LEONTINVS		2			1		1	1	1	4	1	1		3	1			1			17
OPPIANVS																				1	1
PAMPHILVS		1			1		1			3			1	1							8
PAXAMVS		2		1	1		2		1	4		3	3	3	2		2	1			23
PELAGONIVS																3					3
PTOLEMAEVS	1																				1
PYTHAGORAS								1													1
QVINTILII	1	2	1		1		2		1	2	1	1		2			1	1			16
SOTION		3			7	1	3	3	2	2	1	2	1				3				28
TARANTINVS		2		3			1		4	1	1	1								2	15
THEOMNESTVS																5			1		6
VARRO		3	1		2	1	1	2	1	1		2		1			1		1		17
VINDANIONIVS		1			1		1			2		1									6
XENOPHON																			1		1
ZOROASTRES	2	1			1		3			1			1		1						10

前5・4世紀から5世紀ころまでの古代ギリシア・ローマの著者の著作抜粋がG.の各巻に収録されていることが分かる。

##### 5. 著作家に関する若干の問題

第1巻の主題においてCassianus Bassusは「農業および樹木の世話や麦畑やその他多くの有用な事について古代の様々な人々によって言われていることを一つに集約して、私はこの書を編纂した。それはプロレンティノス、およびウーイングダニオーニオス、およびタランティノス、およびアナトリオス、およびペーリュティオス、およびディオパネース、およびレオンティオス、およびデーモクリトスの書物、およびアプリカノスの逆説、およびパンピロス、およびアプーレイオス、およびパロン、およびゾーロアストゥレース、およびプロントーン、およびパクサモス、およびダモゲロン、およびディデュモスおよびソーティオーン、およびキュンティリオイの書物から集められている。」と記している。前節の表を見て頂きたい。見出し中に確認される32名中19名がここに列挙されていることになる。列挙されていない13名のうち5名は第16巻にしか現われない。彼らは、Hippocrates (かの有名な「医学の父」か?)を除くと、*Hippiatrica*と呼ばれる『馬の医学書(獣医書)』の作者たちで、おそらく馬の医者(獣医)であったと考えられる。残り8名中6名はわずか1回、他の2名も2ないし3回しか現われない。このことから、主題において列挙されている19名は取りも直さず『選集』の主要

な種本の著者たち<sup>3</sup>であったとすることができる。

ところで、ここで問題になるのはAnatoliusとBerytusとVindanioniusの3名である。E. Oderに拠れば<sup>4</sup>、見出し中に現われる著作家は全部で30人であるとされ、我々の数より2人少ない。つまり彼は上述の3名を同一人物と考え、その人物をBerytus出身のVindanionius Anatoliusと見なしている。そして、彼はこの著者が見出し中に現われる頻度は42回であるとする。前節の表を見れば、分かる通り、この数は実はAnatolius 19回、Berytus 17回、Vindanionius 6回を足した数に等しく、彼がこの3名を同一人物と見なしていることの確かな証拠といえる。

では、この3名を同一人物と見なす根拠はどこにあるのだろうか。それはPhotios (c.810-c.893)が*Bibliotheca*, Cod. 163において、AnatoliosをVindanionius Anatolios Berytusと記していたことによる。

P. NeedhamはAnatoliusの項<sup>5</sup>に長い注記を付してこの問題を議論している。そこにおいて彼は、おそらく、Cassianusはἐκ τοῦ Φλωρεντίνου, καὶ Ταραντίνου, καὶ Οὐίνδανιωνίου Ἀνατολίου Βηρυτίουと記していたが、Geoponikaの編纂者がκαὶ Οὐίνδανιωνίου, καὶ Ταραντίνου, καὶ Ἀνατολίου, καὶ Βηρυτίουと改作したのではないか、その結果、一人の人物があたかも3名の人物であるかのように誤って伝えられたのではないかと推定した。更に、彼自身は当該のAnatoliusをEunapiusが*vit. soph.* 85の中で言及しているBerytus出身のAnatoliusと、またAmmianus Marcellinus, XIX. 11.2で言及されているIllyricumの長官であったAnatoliusと同一

人物とする<sup>6</sup>。果たして、この推定は正鵠を射ているのだろうか。

仮に Cassianus が ἐκ τοῦ Φλωρεντίνου, καὶ Ταραντίνου, καὶ Οὐίνδανιωνίου Ἀνατολίου Βηρυτίου と記していたとしよう。それではなぜ17名 (Οὐίνδανιωνίου Ἀνατολίου Βηρυτίουを一人と見なした場合) 中、彼のみがフル・ネームで記されたのだろうか。確かにAnatoliusの農書がCassianusの『選集』の底本の一つであったと言われているので、彼に敬意を表してフル・ネームを用いたと言えるかもしれない。しかしもしそうであるとすれば、Didymosの農書も同じく底本の一つであったと言われているので、彼もΔίδυμος Ἀλεξανδρεὺςと記されてもよかったのではないか。しかしそうはなっていない。したがって、CassianusがここでAnatoliusにだけこのような名前の表記方法をとったとはどうしても考えにくい。

NeedhamはMarcus Tullius Cicero、いわゆるかの有名なCicero、を例にとり、同一人物が modo Marcus, modo Tullius, modo Ciceroの如く呼ばれ得ることを示して、nunc Vindanius, nunc Anatolius, nunc Berytiusの場合もこの例にあたりとし、あたかも3人の著者の如く見えるが、実際は一人である、とした。しかし、当該箇所 で用いられている接続詞はκαί, etであり、ἢ, nunc, modoではないことに留意すべきであろう。また、テキストの人名の順番に目を向けると、καὶ Οὐίνδανιωνίουとκαὶ Ἀνατολίουの間にκαὶ Ταραντίνουが挿入されており、人名の綴りもΟὐίνδανιωνίουであり、Οὐίνδανίουではなく、またΒηρυτίουであって、Βηρύτουではないことを指摘しておきたい。

仮にCassianusがκαὶ Οὐίνδανιωνίου Ἀνατολίου Βηρυτίουと記していたとしても、著者名はἈνατολίουと記されたはずであり、あるときはΟὐίνδανιωνίουあるときはἈνατολίουまたあるときはΒηρυτίουといった具合に三つの名前を使い分けることはなかったであろう。まさに、Cassius Dionysius UtiensisがΔιονυσίουと記されたように。

では、見出しにおける著者名引用の際に、Οὐίνδανιωνίος Ἀνατόλιος Βηρύτιοςはどのように記

されていたのであろうか。上述のように、三つの名称の頻度の合計は42回、そのうち次の22例がわれわれに興味深い知見を与えてくれる。つまり、

(ローマ数字は巻、そのあとのアラビア数字は章を示す。)

1.	II.	9. Βηρυτίου	10. Ἀνατολίου
2.	V.	10. Ἀνατολίου	11. Βηρυτίου
3.		25. Ἀνατολίου	26. Τοῦ Αὐτοῦ
4.		33. Βηρυτίου	34. Οὐίνδανιωνίου
5.	X.	18. Ἀνατολίου	19. Βηρυτίου
6.		43. Οὐίνδανιωνίου	44. Τοῦ Αὐτοῦ
7.		69. Βηρυτίου	70. Τοῦ Αὐτοῦ
8.	XII.	36. Ἀνατολίου	37. Βηρυτίου
9.	XIV.	20. Βηρυτίου	21. Ἀνατολίου
10.	XVIII.	17. Ἀνατολίου	18. Βηρυτίου
		19. Τοῦ Αὐτοῦ	20. Τοῦ Αὐτοῦ

全494例の見出しの著者名引用の仕方から明らかかなように、1. 異なる名前が前後する場合 (Nos.1-2,4-5,8-9,10) は同一著者ではあり得ない。2. 前述したように、同じ著者が複数の章にまたがる場合 (Nos.3,6-7,10) は2度目からは「同著者の」(Τοῦ Αὐτοῦ)と記される。3. 同一著者を複数の名前ですす例は他に見当たらない。したがって、以上の諸例は明らかに3人が別人だったことの証である。

結局、Cassianus自身は明らかに3人を別人と考えていた。したがって、おそらくPhotiosが、この箇所に基づいて、3人を誤って一人と見なしたのではないかと推量される。

(いとう ただし:教育学部 教授)

1. E. Oder, 'Geoponika', *RE*, 7, 1, 1223.  
 2. 第1巻の主題は第2巻以降の主題とその書式において異なっている。第1巻の主題はCassianusによって書かれ、第2-20巻の主題はおそらく10世紀の編纂者によって挿入されたものと思われる。  
 3. 3節で述べたように、『選集』が底本としていた4世紀の二つの農書のうち、Anatoliusの συναγωγή γεωργικῶν ἐπιτηδεύματωνは、その編纂にあたって9名の著作家を利用したとされるが (Photios, *Bibliotheca*, Cod. 163参照)、そのうちの8名が19人中に含まれている (本文中の図参照)。尚、8名のうちFlorentinusとLeonは第1巻の主題においてそれぞれFlorentinus, Leontinusと記されている。Photios, *Bibliotheca*については、I. Bekkerの校訂本 (Berlin,1824) を参照した。  
 4. E. Oder, op. cit., 1221.

5. 「アナトリオスに関しては不詳。アナトリオス、テマギストウロス オドシウス帝の長官 (スーダ)。 *Hippiatrika*, pag.217に引用されている。」とあるのみ。附属図書館所蔵のGに収録されているNeedhamのProlegomena, XLVIII-L頁参照。  
 6. AnatoliusはBerytus (Beirut) 出身のシリア人であり、母国で法律を学んだあと、ローマに出て、テオドシウス帝のMagisterとなった。Libaniosと親交があった。360年没。A. Lippold, 'Anatolios', *Kl. Pauly*, Bd. 1, 335参照。但し、この人物が当該のAnatoliusであったとした場合、なぜ彼がこのような農書を編纂したのかは不明。

## ゲオーポニカ(ビザンチン時代の農業書)と魚醬

田口 一夫



鹿児島大学附属図書館の所蔵書に「ゲオーポニカ」が見つかったというニュースは、地味な研究書の分野でもいささかショックだったようでWebでも大きく取り上げられていた。いずれじっくりと拝見したいと思っていたら、

同館所蔵書の特別展示に出展されるとあって早速訪館した。内容は農業よりもっと広い分野を含むと推測して、秘かな期待があった。

「ゲオーポニカ」とは出版時の書名だが、当時のギリシャ語ではかなり広い意味での「農業分野」を意味していた。ところが後世の訳では現在の「農業」のイメージで捉え、18世紀後半の再版では副題に「農業書」を付けた(Wikipedia)ので内容理解が混乱したと私は思う。

すなわち両者では農業という言葉の範囲が異なっているのに、現代人が意識する農業分野について記したと誤断した。ギリシア時代に土で手を汚す仕事とは建設と農業が大部分だから、「ゲオーポニカ」を広い意味での農業に解しても大過なかったらと思う。私が書名を付けるならばさしずめ「産業技術書」と言うことになる。

実のところ、この種の誤断によって私も手痛い目に遭ったのだ。ギリシア・ローマの古典で水産についての資料を捜していたところ、文献類の冠が農業だから専門外として没にしたら、意外にも漁業関係の資料が含まれていたのだった。それを踏まえて、この小論名に「農業書」と「魚醬」という正反対の分野の語彙を並べた次第である。標題恐るべしと自戒している。

従って本書が「農業書」とあってもサカナの記述が含まれると推測し、先出の「秘かな期待」をしたのだ。本書は20巻構成で、第20巻は「サカナ」だったから私のカンは当たった。「現場に聞け」の教訓は無駄ではない。この巻の内容は魚の釣り方一般、淡水養魚場の記事が続くので、事典風の項目の羅列と思ったが、最終部分では3頁にわたり「魚醬」(ガルム)の製造法が記されている点に注目した。ローマ帝国においてガルムは食

生活は勿論医薬品にも使われたほど重要だったから、この記述量を見てローマ時代の社会的風潮を反映した書物であると納得した。

ガルムを和訳してサカナの醤油と書くが、わが国のサカナの塩辛及び魚醤油とほぼ同じ製法であり、魚醬は名の通り水分の多いのが特長だ。グルメ・ブームの現代日本では、料理本でも魚醬の文字が躍っているように感じられるし、スーパーの棚にまで東南アジア産のナンプラー・ニョクマの瓶が並んでいる。さらに何かといえば秋田銘産のショツツルをはじめとするわが国産魚醬の講釈を聞かされる。

醬の類は古代中国のレシピにも出てくるように、人類の料理事始めの頃からの定番だ。ガルムの元祖はギリシアでありガロンと呼んでいたが、ローマでは「ガルム」名が定着し殊の外珍重していた。ローマ帝国の版図の拡大と共に、ガルムは地中海から北ヨーロッパ一円にまで必須の調味料として伝播していった。

このようにローマ人にとってガルム抜きのお食事は考えられないので、帝国のいかなる僻地までも送り届けられていた。例えば、兵士の行くところに壺入りのガルムも同伴したように、スコットランドとの防衛線(ハドリアヌスの城壁)を守る兵士の宿舎にガルムを入れたアンフォラ(陶器の壺)を見る。しかし寒いブリテン島ではガルムを作れないが、ガルムなしでは士気に影響するためフランスのブルターニュに工場を造り、北ヨーロッパの駐屯軍への補給を万全にした。

ここで話はいささか逆戻りして「ガルム」を取り上げた動機から始めよう。

私の大学勤務時代の研究テーマは電波による位置測定だったが、退職すれば実験ができないから次に選んだのが「海の技術史」である。今日わが国には世界中の海で獲られた魚が流れ込んでいるのに、海の活動を背景にした技術史はほとんど出版されていないことが研究のきっかけである。その思いを加速させたのはポルトガルの小さい博物館を訪問したときの発見で、同国マグロ漁業の展開の素晴らしさだった。

ポルトガルは新大陸発見でコロンブスに先を越されたとは言え、大航海時代の先駆けだった

ヴァスコ・ダ・ガマの偉業を知ってはいた。しかし、その博物館で目にしたのは大規模な定置網模型だった。加えて壁一面に描かれたマグロ漁師の絵からは飛沫が飛ばんばかりの躍動感が漲っていた。当にカルチャー・ショック。こうした網は日本漁業の得意技といわれていたはずだったのに、威張っていられたのは仲間内のことで、世に言う唯我独尊の類ではないかと。

いろいろと調べたところ、ジブラルタル海峡の兩岸で古代ローマ人がマグロを獲り、卵巣をカラスミにしていた加工場があったことを知った。その後、遺跡が発掘されて見学できると教えられて、まずは現地に駆けつけた。地先の海でマグロを獲り、そのまま海辺で解体した。それらを主原料として、ガラムと塩漬けマグロを作った。これらを入れるコンクリート製の角型・丸型の大型タンクが並んでいる遺跡を訪れたのは、タリファ郊外の浜辺である。(図1)

街はローマ時代に地方の中心であったから、丘の斜面には円形劇場をはじめとする典型的なローマ様式の建物一式が配置されていた。先ずは絶景に見とれる。紺碧の海峡を隔てた対岸はアフリカ大陸の北西部であり、桜島に似た赤茶けた荒々しい岩肌は海の色との対象に際立っていた。ギリシア神話の時代のものではないにしても、少なくともローマの遺跡を目のあたりにしたのだから、私はしばし遠い過去の時代にタイムスリップした幸せな思いに浸った。(図2)

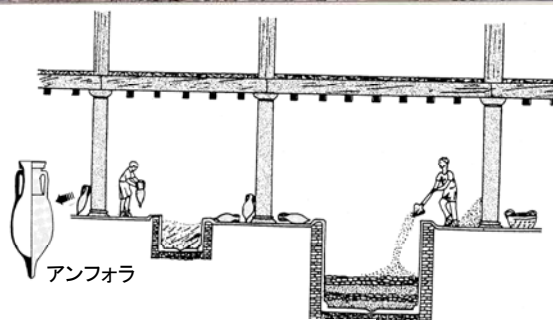


図2 マグロ加工場の概要 (松尾竹泰氏提供)

ここのタンクを見て気がついたのは、施工されたセメントの強固さで、濃い塩分に曝されながらもさしたる損傷が見られない。もっともローマ人が築造した港及び防波堤などが現在でも多く残っているのは、台風がないためかとも思うのだが、彼らの創出した技術が現代土木工事の源流だったと教えられた。

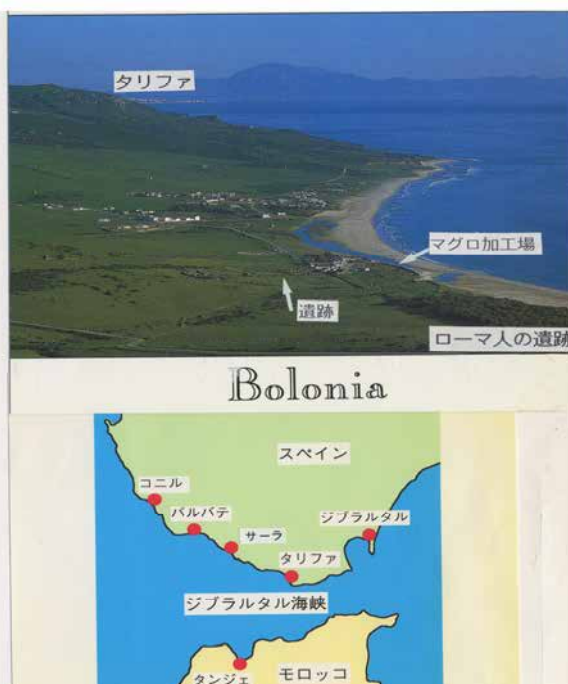


図1 ローマ時代のマグロ加工場 (タリファ近郊ボローニアのローマ人遺跡)

現在のマグロ漁場はコニル、バルバテ、サーラ

今日伝わるガルム作りの方法は多様であるが、その製法は単純だから基本的にはほとんど同じで、小魚あるいは少し大きい魚の切り身に加えて、内臓と鰓を塩と共にタンクに投入しておく。イカの塩辛で肝臓を入れると味が良くなるのと同様に、それらに含まれている酵素により、時間がたてばサカナ自身の動物性蛋白質などが分解されるし、サカナの蛋白質は遊離アミノ酸・ペプチドになるから、濃厚な旨味が作り出される。一方、高濃度の塩分は腐敗防止に働き、熟成が進むにつれて味もマロヤかになったところで、日本なら酒の肴だ。こうして塩辛とか魚醤が作られるのだが、熟成の作用は化学的に全く同じなことは言うまでもない。

熟成し終わったガルムの壺の中はドロドロの液体(お粥のような)と骨を見るだけだが、多分強烈な臭いがするだろう。説明のためこの熟成過程を見せたいと言っても、単に化学作用の進行だし、化学式を連ねて説明したのでは芸がないので苦慮していたところ、偶然にもこの工程を巧みに表現したイラストを見付けた。

話は先を急ぎ、その展示場所から始めよう。

スペイン南東部はかつてのカルタゴの植民地であるが、彼らの本国への玄関であったカルタヘナ港を訪れた時に、先ずは珍事に出会した。顔面が引きつるという初めての経験をしたのである。激しい乾燥のせいだろうが、旅行者は驚きただけだし、建物はシロっぽく見えたようだが事情を聞くにもスペイン語が不自由ではね。

さて同市の考古学博物館の門を入ったら、傍にある倉庫の壁に描かれた一見意味不明なイラ



図3 倉庫の壁のイラスト「ガルム」、カルタヘナ考古学博物館

ストに惹きつけられた(図3)。

題して「ガルム」とある。

「サカナ」と「骨」のパターンだから「サカナ」の肉が溶けて「骨」だけとなりガルムができ上がっている。途中経過を省略したアイデアには感嘆した。「ヤルもんだ」と現代スペイン人のウイットに感じ入ったとは言え、彼らの輝く才能の発露としては決して珍しくもない。この国では時々ハッとす

るユニークな工業デザインに出会す。なるほどピカソの後裔に当たるのか・・・。

われわれが塩辛を作るときのコツとは、毎日瓶の中をかき回してじっくり待てということである。すなわち酵素が蛋白質を分解するには時間がかかることを意味したのだ。しかも、熟成速度を決める主な要素は塩分濃度と温度であり、標準熟成なら2-3月間かかると他の文献でも記すから、待ちくたびれる人も多いのだろう。そうした気の短い人間むけに短期熟成法として、陽に当てて温度を上げる手法を「ゲオーポニカ」は紹介している。熟成のもう一つのポイントである塩分を測るには、(規定濃度の)塩水に卵を入れて浮沈状態を目安にしるとも指示している。

こうした自然の旨味だけに満足しないのは世の常で、さらに「美味しいもの」の蘊蓄についてローマ時代の料理書には能書きが列挙してある。

先の太陽熱による速成法は小規模の製法には有効だが、大規模なタンクで用いるには力不足だから、ローマ人は大好きな風呂の暖気でタンクを加熱していた。まさに当時のハイテク工事と言えよう。ガルムと風呂がこんな結び付きをするなどは私は考えもしなかったし、壮麗な建物の中に広がるマグロの内臓とアラだらけの光景などもこれまた想像外だった。

食卓のガルムはどのように用いられていたのだろうか。

紀元前のギリシア・ローマの正餐では上質のガルムが最高の調味料として賞味されていた。そのためにこそレシピではガルムの取り扱いが喧しかったのである。ガルムには魚の頭は言うに及ばず骨や鰓まで入っているから、それらを何回も漉して骨や肉片などを取り去り、できるだけ澄んだ液体にして使った。残りの滓は翌朝の食事にあてているなど、ローマ人の生活は一見華やかでも、家庭では慎ましかったことを知った。それでもガルムの社会的地位について物語っている詩は、今日われわれが良い酒を得たときの心情に通じるものを感じさせる。曰く、良いガルムを手に入れたから小さい気の利いたアンフォラに入れて、友を訪れる楽しみを詠うのだ。われわれなら吟醸酒を携えて一献やろうと・・・。

これだけガルムが持てはやされると、味にも工夫を凝らすのは当然で、各地のガルムをブレンドする工夫が広まった。しかしローマ本国では原料の入手がままならぬために生産量は少ないから、活発な需要に応えるのに植民地からの輸入

に頼るしかなかった。帝国の初期には、漁業の盛んなジブラルタル海峡からモロッコ海岸にかけてガルムの生産地が集中し、規模の大小はあるものの約40箇所に工場が記録されている。

これらのガルムは主としてローマの外港であるオスティアとバスヴィオ火山に埋もれたポンペイに運ばれた。港として優れたポンペイは貿易・漁業で栄えていたが、ガルムも作るブレンドでもまた一頭地を抜いていた。ポンペイのガルム商人たちの邸宅には工場が併設されていたことを、発掘された遺跡が物語っている。近年に見つかったガルム入りのアンフォラを開封したら、強烈な臭いが残っていたとは驚きだ。そのため屋敷にイチジクを植えて臭い消しに使っていたことも分かった。言い換えれば異臭はただならぬ強さだったから、掘際に工場を建てたのだが、2000年前のポンペイの町を覆ったこの薫りに住民はどんな反応をしたのだろう。当時の人びとにはえも言われぬ芳香であったかも知れない？

ポンペイの遺跡で発見された、ガルムを入れたアンフォラには、その等級・商号などが刻記されていたので、後世に生産地を追跡できたのは思わぬ幸이었다。ランク付けされた銘柄品のガルムの中で、ユダヤ人の好んだ特注品はサバをベースにしたことで有名だった。しかし、なんと

いっても最高の品はマグロの入ったスペイン産の品で、名声を博して上流階級に愛用された。

これ程までに活況であったガルム事業もローマ帝国の斜陽化と時を同じくして衰退に向かい、現在ではその製法さえ残っていないと史家は嘆く。だがガルムの継承者として今日もてはやされる、アンチョビー・ソース及びアンチョビーの偉大な存在を蔑ろにしてはいないだろうか。なめ味噌のようなアンチョビー・ペーストをクラッカーで楽しみながら白ワインを傾けては・・、と言うようにこれらは現代のレシピの最高クラスと私は思っている。

#### 【参考文献】

田口一夫：「黒マグロはローマ人のグルメ」、成山堂書店、2004

田口一夫：「古代ローマみなと物語」、『作業船』276、42-49、2004

田口一夫：『「ゲオーポニカ」と魚醤』、『一冊の本』11(12)、9-14、2006

【注記】鹿大蔵書の“Geoponica”はショウ・ケースに収められていて手に取れないので、第20巻サカナを読むにはWebの“Ancient Library”に公開されている英訳版によった。(2006.11.7)

(たぐち かずお：本学名誉教授)

## ニュース&トピックス①

### 「オンラインリクエストサービス」のすすめ

図書館ホームページからオンラインで「学外文献依頼」、「図書の出貸状況の照会・予約」、「図書購入申込、予算状況の照会(教員のみ)」ができます。

このサービスを利用するには図書館カウンターへ利用申請書を提出してパスワードを取得する必要があります。

詳しくは図書館ホームページ オンラインリクエスト申込ガイド、または下記受付窓口へどうぞ。

郡元地区 中央図書館メインカウンター  
(資料サービス係)099-285-7435 service@lib.~  
(~にkagoshima-u.ac.jpを入れる)

桜ヶ丘地区 桜ヶ丘分館カウンター  
(情報サービス係)099-275-5205 sakura@lib.~

下荒田地区 水産学部分館カウンター  
(図書係)099-286-4051 suisan@lib.~

### 「世界の新聞オンデマンド印刷」および「簡易印刷製本」サービスを始めました

世界各国の新聞

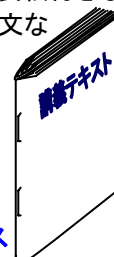


中央図書館では、世界各国のおよそ440種類(2006年12月現在)の新聞の中から、ご希望の当日の新聞を印刷、提供します。新聞によって紙面データ更新時間・値段が異なりますので、詳細はお問い合わせください。

「簡易印刷製本」サービスは、持参したデータをその場で印刷、簡易製本(中綴じ製本・表紙付きなど)することができます。レポート、論文などの資料の製本に大変便利です。

問い合わせ：参考調査係  
099-285-7440 sanko@lib.~

「簡易印刷製本」サービス



## 平成17年度(第7回)鹿児島大学附属図書館貴重書公開 「海が運んだ中世かごしま—陶磁器・中国銭・書籍が語る東アジア文明」展

木場 隆司

標記の公開展示会は、鹿児島大学附属図書館に所蔵している古典籍類を広く一般に公開する目的で毎年開催しているものである。

今年は、「世界史の中の日本という視座に立って、日本の辺境としてみられてきた鹿児島県域を、東アジア世界の文化がもたらされる玄関口としてとらえ、陶磁器・中国銭・書籍などの文物を通じて、新しい『中世かごしま』の歴史像を広く一般に理解してもらおう」というテーマで、以下の日程と会場で開催した。

平成17年11月2日(水)～11月6日(日)

鹿児島大学会場(附属図書館中央館)

平成17年11月18日(金)～11月20日(日)

志布志町会場(志布志町文化会館)

### 事前準備

今回のテーマでは、大陸との文化交流を示す文物を展示する必要があったが、これまでのように展示品の大部分が自館所蔵の古典籍というわけにはいかないため、学外の埋蔵文化財である中国の古陶磁器、古銭などを多数集めることになった。この点については、共催機関である志布志町教育委員会のほか、隼人町教育委員会、金峰町教育委員会の埋蔵文化財担当者の方々に大変お世話になったが、展示品の借り出し、写真の使用許諾等が例年になく多くかなり煩雑な作業となった。

### 鹿児島大学会場

附属図書館1階アトリウムを会場とした。会場では、現物あるいは写真パネルという形で、中国大陸伝来の古銭や古陶磁器、仏教経典、銅鏡、そして附属図書館所蔵の関連古書籍を展示した。最終日の記念講演会では、大田由紀夫法文学部助教授に「中世アジアにおける銭貨流



附属図書館 講演会場

通」、丹羽謙治法文学部助教授に「南九州と中世・近世文学」という演題でお話をいただいた。

### 志布志町会場



志布志町文化会館 展示会場

志布志町文化会館2階の集会室を借用して展示会を開催した。展示品は、鹿児島大学会場で出品したもののほかに、志布志町内の遺跡資料、出土品、仏具類などを出品した。また、鹿児島大学会場と同様に最終日に記念講演会を開催した。演題は、日隈教育学部助教授「島津荘と日宋貿易—志布志・隼人・金峰町域を中心に—」、原口泉法文学部教授「志布志大慈寺と京都・中国」であった。



志布志町文化会館 講演会場

志布志町会場で特筆すべきことは、志布志町教育委員会の仲介により、鹿児島大学附属図書館との共同開催という形で、同町に所在する臨濟宗の名刹、大慈寺の36年振りの所蔵品公開が実現したということである。大慈寺は14世紀に創建された全国屈指の禅宗寺院であり、南

平成17年度貴重書公開「海が運んだ中世かごしま－陶磁器・中国銭・書籍が語る東アジア文明」展

九州と大陸との交流の深さを窺わせる文化財を多数所蔵している。ふだん公開される機会がないということもあってか、期間中は遠く関西在住



大慈寺会場



住職による資料の解説(大慈寺本堂)

の研究者が訪れるほどであった。

展示会を振り返って

総入場者数は531名であり、うち図書館会場は218名という過去7回目で最低の数字となったが、志布志町会場は313名で過去2番目に多い数字となり、対照的な結果となった。

図書館会場の入場者不振の原因はいくつかあると思われるが、担当者の反省としてまずあげたいのは、「一般向けのわかりやすさ」という点が不足していたということである。「東アジアの文化交流という視点で、鹿児島の中世史を見直す」というテーマは、歴史研究者や歴史愛好家にとっては面白くとも、初心者にとってはハードルが高いという印象が残った。

一方、志布志町会場では、図書館会場とは打って変わって入場者数は好調であった。地元で馴染みの深い大慈寺の36年振りの所蔵品公開がインパクトを与えたようである。また、志布志町教育委員会の方々から、大慈寺との交渉、広報、町内文化財の出品などさまざまな点で積極的な協力をいただいたことも貢献している。今回の展示会は、学外機関との連携・協力という面においては、非常に良好な関係を築くことができたと評価できるのではないかと思います。

(こば たかし:情報管理課 学術コンテンツ係長)

平成17年度貴重書公開「海が運んだ中世かごしま－陶磁器・中国銭・書籍が語る東アジア文明－」講演要旨

「中世東アジアにおける銭貨流通」

大田 由紀夫

日本が「中世」と呼ばれていた時代(およそ鎌倉～安土桃山時代)、日本を含めた東アジアの多くの地域で、方孔円形の銅銭が主要な通貨として流通していた。その銅銭の殆どは中国で製造された中国銭であり、東アジア各地の人々は中国銭を輸入して自国の通貨として行使していたのである。

中国銭(＝渡来銭)が日本に流入し始めるのは、一般に12世紀後半の頃からだったとされる。そして、中世日本における渡来銭の本格的流通の開始時期については、土地売券にみられる支払手段の変遷や日本全国から発掘される所謂「備蓄銭(埋納銭)」の登場時期などから推測することができる。その種のデータを参照すれば、日本における渡来銭流通の普及には、1220年代と1270年代の2つの画期が存在していたことがわかる。これらの時期に渡来銭の流通が急速に浸透したのは、実は同時代における中国の貨幣動向にその原因があった。1220年代には金朝支配下の北中国で銅銭の使用が禁止され、ついで1270年代には江南地方で銅銭の使用が禁止されるようになり、使い道のな

くなった中国の銅銭が海外へ大量に流出するという出来事が、1220年代と1270年代に発生していたのである。つまり、日本で渡来銭の流通が盛んになるのは、中国で銅銭が使われなくなったからなのである。とくに1270年代は、日本全土に渡来銭流通を普及させた一大画期であり、この時期以降、中国から大量の銅銭が日本へと流入する。ところで、13世紀末の日本は「中世社会経済発展の画期」ともいわれ、京都は巨大消費都市へと成長し、地方でも定期市が盛んに設けられるようになる。このような事象を踏まえると、1270年代を画期とする大量の渡来銭流入は、日本の銭貨流通の活性化を促して市場経済に刺激を与え、これを目覚ましく発展させる一因になっていたと考えることも可能である。渡来銭流入の動向は、日本の歴史動向に大きな影響を与えていたようにみえる。なお、渡来銭流通の一般化という事象は、中世日本だけにみられるものではなかった。例えばインドネシアのジャワなどでも、この時期、金銀貨から銅銭へという流通貨幣の劇的転換が起こり、急速な銭貨流通の拡大が確認できる。渡来銭流通の活発化という東アジア・東南アジアの広い範囲で同時に観察できる事象は、一国史的な発想では到底説明できない。



14世紀後半になると、日本の渡来銭流通の風向きはまた変化する。南北朝～室町期にかけて、銭貨流通の「後退」現象がみられたのである。例えば、「備蓄銭」の発掘数は、相前後する時期の数値と比べて激減している。また、畿内周辺部のある地方においては、それまで支払手段として使用されていた銅銭がこの時期には使われなくなってしまうといった現象などもみられた。こうした渡来銭流通の「後退」現象の原因を探っていくと、中国大陸の動向がやはり注目される。この時、中国では元から明への王朝交替が惹起していた。新たに誕生した明朝は、元朝とは異なり、民間人の自由な海外渡航を禁止する「海禁」政策を実施する。海禁が行われると、中国から海外への銅銭流出も激減していった。これが日本における銭貨流通の「後退」現象を引き起こした主因と考えられる。その後、15世紀初頭には日明貿易(勘合貿易)が開始されることなどもあって、日本では再び銭貨流通が活発化していく。

最後に、近年の研究によれば、中世日本の渡来銭流入の終焉は16世紀後半に訪れる。1570年代以降、マニラ経由で中国の福建漳州に大量の新大陸銀が流入するようになる。この時、漳州の流通貨幣が銅銭から銀へと急速に転換し、当地の銭流通・銅銭鑄造を途絶えさせた。漳州は中国銭の

一大輸出拠点であり、その鑄造停止は渡来銭を日本へ供給する窓口が閉じられたことを意味した。こうして日本の銭貨流通を支えていた中国銭は輸入されなくなり、渡来銭に代わって日本国内で通貨の役割を果たすようになったのが、当時最も安定した価値を持つ財貨である「米」であり、このことが近世日本における「石高制」成立の歴史的前提になったのである。

以上のように、モンゴル帝国下のユーラシア大陸において人・物・財が未曾有の規模で流動した、13世紀にその流布が本格化する中国銭は、東アジアの広範な地域に浸透していった。近代の遙か以前の東アジア海域には、中国銭を共有する緩やかな通貨圏が形成されていたといえる。しかし、この中国銭流通圏も、明朝による海禁実施などの紆余曲折をへたのち、16世紀後半に始まる世界的な銀流動の前にその影を薄くし、ついには歴史の舞台から姿を消す。

こうした歴史を眺めてみると、中国銭流布の過程とユーラシアレベルで展開する歴史動向との間に密接な連動性が存在していたことを看取できる。総じて、渡来銭流布の歴史は、直接的には中国国内の動向に強く規定されていたものの、他方その中国の動向自体も、よりグローバルな歴史動向から多大な影響を受けていたようにみえる。

(おた ゆきお: 法文学部 助教授)

## 平成17年度貴重書公開「海が運んだ中世かごしまー陶磁器・中国銭・書籍が語る東アジア文明ー」講演要旨

### 南九州と中世・近世文学

丹羽 謙治

日本の古典文学と南九州との関わりを考えると、韻文では漢詩・和歌・連歌など、散文では物語・草紙などさまざまな分野が考えられるが、今回は、日本の中世・近世文学作品に登場し、南九州で伝説として伝承されている二人の人物をとりあげ、その人物像の時代による変遷について述べることにしたい。

まず一人目は、強弓の射手として知られ、『保元物語』に活躍が描かれている鎮西八郎源為朝である。『保元物語』によれば、為朝の身長は「七尺ばかり」(二メートル十センチほど)、左手が右手よりも「四寸」(十二センチ)長く、生まれ付いた弓の名手であり、戦術にも長けた豪傑である。保元の乱で敗れ、左右の腕の筋を抜かれて伊豆に流されたが、時の政権に対する反抗的な態度は改めることはなかった。『保元物語』で描かれている為朝は、「梟雄」と呼ぶに相応しい。近世の初期にはすでに、為朝には伝説がまといつく。近世中期の百科事典『和漢三才図会』では、為朝が官軍と闘った後、大島で自殺したという記述の後、一説として、為朝が

嶋伝いに琉球に逃れ、同地の王となったことを挙げている。また、巷間、為朝は鬼が島へ渡ったとの伝説も広まる。曲亭馬琴の代表的読本『椿説弓張月』は、こうした伝承をもとに、中国白話小説を取り入れ、虚構を織り交ぜて作られた英雄物語である。この中で為朝は藤原信西の謀略によってさまざまな苦難を味わわれる人物であるとともに、知仁勇の三徳を備えた「英雄」として描かれる。一方、物語の構成を考える時、為朝は、保元の乱の前後それぞれ一回ずつ九州から琉球に渡っている。一度目は、上皇に献上するための鶴を探し出すための渡海。もう一回は、伊豆から四国を経て九州に渡った為朝が、妻の白縫らと再会し、平清盛を討つため船出すると、暴風に会い、崇徳上皇の魂魄に導かれて琉球に漂着するというもの。いずれも作者馬琴の計算された筋立てである。馬琴は、薩摩藩の領国を避けるかのように為朝を移動させている。薩摩・大隅の地名もほとんど登場せず、肥後国から琉球へと飛んでしまうのである。この理由を考えてみると、近世、琉球を実質支配していた薩摩藩(島津氏)を描くことを馬琴は避けたためではないかと考えられる。虚構の物語であり、舞台は遠く平安時代末期にすえられているとはいえ、徳川將軍家はもちろんのこと、当代に存続する

大名・旗本・公家のことを取り上げたと見なされる危険性はあった。『弓張月』執筆当時、馬琴は奉行所に本屋たちともに出向き、政治向きの書物を作らぬように命じられ、請書を提出していたということもある。検閲は厳しさを増していたのである。

二人目は、俊寛である。反平家の陰謀(鹿ヶ谷事件)を画策した中心人物として、丹波康頼・少将成経とともに鬼界島(現在の硫黄島)に流されたが、ただひとり恩赦にもれた。その時のありさまは『平家物語』の「足摺」で有名である。ただ、「足摺」という動作の意味するところについては、地団駄を踏むという説と、(寝転んだ状態で)足をすり合わせるという説とに解釈が大きく分かれている。『平家』では、極限状態にある俊寛を「子ども」のように描いていることや、他の用例を参考にしても、後者の説が妥当かと考える。近世においては、歌舞伎や浄瑠璃で、絶望的な運命に耐え、かつ、人情をよく理解する人物として俊寛像を造形してきた。近松門左衛門の浄瑠璃『平家女護島』がその代表例である。現代のわれわれも、どこかで俊寛を孤独に耐える人物として捉えているのではないか。その結果、子どもがだだをこねて、足をばたばた蹴る動作を俊寛に相応しくないものとして無意識のうちに排除し、「地団駄を踏む」という悔しさを表現する動作として解釈してしまったのではないだろうか。また、『平家物語』の挿絵にも時代によって大きな違いを見ることができる。近世中期の版本の挿絵には、坊

主頭の弱々しい姿で描かれるのに対し、時代が下るにしたがい、蓬髪でぼろぼろの衣をまとった鬼気せまる姿で描かれていく傾向がある。われわれが俊寛像を歌舞伎でみるような姿で思い浮かべるのは、江戸後期からの絵画や文藝作品の影響を少しずつしらずのうちに受けているからなのであろう。

中世と近世——このふたつの時代には大きな違いがある。中世は、戦乱・疫病・災害等のために人々にとって過酷な時代であった。最近報告された医学的研究によると、鎌倉時代の人の平均寿命は24歳とのこと。人々は神仏にすがること辛うじて生を確かなものとするほかはなかった。一方、近世は、相対的に平和な時代であり、経済的にも豊かになり、人は楽しみを追求する余裕が生まれ、社会のなかにあつては「分」を守る倫理性が求められた。

源為朝は、あぶれ者的な「梟雄」から、三徳兼備の「英雄」へ、俊寛は、運命に翻弄される、葦の葉のようにはかない悲劇的存在から、運命を受け入れ、主体的に行動する人格者へと変化していった。文学に現れた為朝・俊寛はその時代をよく映し出していると言えるのである。

最後に、南九州にはこの二人にゆかりのある遺跡や伝説が数多く残されていることも付け加えておきたい。

(にわ けんじ:法文学部 助教授)

## 平成17年度貴重書公開「海が運んだ中世かごしまー陶磁器・中国銭・書籍が語る東アジア文明ー」講演要旨

### 島津荘と日宋貿易

#### ー志布志・隼人・金峰町域を中心にー

日隈 正守

九州南部には日宋貿易の拠点となった地域が多く存在している。今回「海が運んだ中世かごしまー陶磁器・中国銭・書籍が語る東アジア文明ー」の中で取扱った志布志・隼人・金峰町域は、何れも日宋交易の拠点であったと考えられる。この中で今回地方展示会を行った志布志町域で日宋交易が行われた理由やその実態、隼人・金峰町域と比較した場合の志布志町域における日宋交易の特徴について考察した。

現在の志布志町域は日向国諸県郡救二(仁)院に所属し、藤原摂関家領荘園島津荘寄郡であった。寄郡は、半不輸(税の中心部分である所当(官物)を国司に納めて、付加税・雑税部分にあたる雑公事を国司に納める事が免除されて、荘園領主に納められる)の一形態で、荘園領主の取分が多い(所当を国司と荘園領主の両方に納め(荘園領主の取分の方が国司の取分より少

し多い)、雑公事を荘園領主に納める)収取形態である。寄郡は、荘園領主が天皇家関係者や藤原摂関家等政界の有力者である場合に設定されている。

救二院は、古くから水陸交通上の要衝であった。また救二院の志布志湊は、様々な物資を都や国内外へ運ぶ際には重要な拠点であった。志布志湊を含む救二院は、前述の様に島津荘寄郡であり、日向国司と荘園領主(藤原摂関家)両方の支配下にある。救二院が島津荘寄郡に止まり島津荘一円領化しなかった理由は、日向国司と荘園領主両方の意図の結果であると考えられる。日向国司は、志布志湊を含む交通上の要衝である救二院に対する支配権の維持を考えていたと想定される。これに対して荘園領主側は、救二院の島津荘一円領化を意図していたと推測される。救二院の北隣は大隅国深河院・日向国諸県郡南郷・同国同郡中郷、救二院の南隣は日向国諸県郡救二郷、何れも島津荘一円領である。荘園領主側は、救二院も島津荘一円領化する事を考えていた可能性が強いと思う。しかし救二院に対する支配権を維持したいと考え

ている日向国司との妥協の結果、救二院は国司と荘園領主両方の支配下である島津荘寄郡となったと考えられる。

島津荘は、11世紀前期に大宰府府官平季基の日向国諸県郡島津の地(日向国建久岡田帳における島津荘一円領である日向国諸県郡島津院)の「開発」と藤原摂関家への寄進を通じて成立した荘園である。平季基は、大隅国衙焼討事件を起こしている。この事件の背景には、島津荘域拡大による季基と大隅国司との対立関係の存在が先学により指摘されている。恐らくは交易による利潤獲得を意図して、季基は救仁院からの水路上に接する大隅国串良院や同国肝付郡に島津荘域を拡大する事を企て、季基のこの動きに対して大隅国司が強く反発した結果両者の間に激しい対立関係が生じ、それが高じて季基の大隅国衙焼討事件に至ったと考えられる。季基の事件から想定される様に、島津荘は立荘以後比較的早期に大隅国内への拡大を示したと考えられる。但し当該期における島津荘の拡大部分は、荘園整理等の要因により後には続かないと考えられる。島津荘の中心は前述日向国諸県郡島津の地に置かれたが、島津の地より荘園年貢を都に運ぶ場合志布志湊が重要拠点になったと考えられる。故に志布志湊は、島津の地の外港的存在であったと考えられる。

島津荘日向国諸県郡救二院において日宋交易の存在を示す物は、山口神社(現志布志町安楽に鎮座、山宮神社)に伝来している宋(960~1276)製鏡である。山口神社所蔵宋製鏡は、救二院又は志布志湊と宋との交易を示す唯一の物的証拠である。救二院における日宋交易を示す物証は少ない。しかしこの事実が、救二院における日宋交易の実態をそのまま示すものではない。明治初期に政府により行われた廃仏毀釈の結果救二院においても、寺院関係の膨大な文化財が失われ

ている。廃仏毀釈の結果、本来寺院に存在していた日宋交易によりもたらされたものが失われている可能性を考えざるを得ない。

大隅国一宮大隅国正八幡宮(現鹿児島神宮)が鎮座している桑西郷(大隅国正八幡宮一円領・半不輸領、現隼人町域も桑西郷に含まれる)における日宋交易を示す物として、大隅国正八幡宮神官桑幡氏館跡から出土した12世紀後半に宋の龍泉で製造された青磁碗がある。桑幡氏は、『長門本平家物語』巻5、伯耆局項によれば、平清盛と親しい関係にあった事が記述されている。桑幡氏は、日宋交易を推進した平清盛との関係で日宋交易に関係していた可能性がある。

薩摩国の国衙領であり、宇佐八幡宮の神宮寺宇佐弥勒寺末社八幡新田宮領や後に八幡新田宮と一体化する五大院領、安楽寺(太宰府天満宮の神宮寺)領薩摩国分寺領等も存在する薩摩国阿多郡(現金峰町域)万之瀬川下流域からも宋との交易を示す物証が多く見つかっている。宋製陶磁器(青磁器・白磁器・壺・盤)や宋銭等が見つかっている。阿多郡においては、輸入陶磁器・銭は宋製のものが殆どである事が特徴である。

日向国救二院は、大隅国桑西郷・薩摩国阿多郡と比較して日宋交易関係の遺物が少ない。このため救二院における日宋交易の実態は、中々判明しにくい。しかしこうした状態は、廃仏毀釈の結果でもある。救二院における日宋交易の実態を復元していくために、考古学の発掘成果に注意するとともに、廃仏毀釈前に編纂された『三国名勝図会』・『神社調』・『寺社調』等の寺院関係記載の中から宋からの輸入物を調べあげる作業を行う必要がある。この様に考古遺物と文献の両方から可能な限り史料を収集して、救二院の日宋交易の実態を解明していく事が今後の課題である。

(ひのくま まさもり:教育学部 助教授)

## ニュース&ピックアップ②

### 鹿児島大学教員著作コーナー

中央図書館1階に鹿児島大学教員著書コーナーを設けています。

特に学生のみなさんにとって、本学の先生方の著書に触れるよい機会となることと思います。ぜひご利用ください。

また図書館では、本学関係者の著書の収集に努めております。

著作刊行の際は、附属図書館 資料受入係(内線:7420)までご連絡ください。

研究成果報告書や科学研究費等の図書もあわせてご寄贈いただけましたら幸いです。

資料サービス係 (内線:7435)

e-mail: service@lib.kagoshima-u.ac.jp



## 「本はいのち！」

森園 壽

このたび、平成18年12月末日をもって退職するにあたり、図書館報「南風」の、原稿依頼があった。最後になって、あまり説教がましいことも書きたくなかったのであるが、編集委員(寿福さん)の、「何でもいいので一言お願いします！」で断りきれず、日ごろつら感ずるところを記す次第である。

公僕である図書館員として、悲しいことをまずは一言。

新聞の朝刊を読んでいると「鹿大生が乗ったバイクが電柱に激突死亡」の記事が載っていたとする。わたしは、まず出勤すると、この学生が図書館の本を借りていないか調べる。借りていないとほっとする。

もし借りていたとする。さて、どうしたものかと思案することになる。頃合いを見計らって、丁重に電話で事の次第を遺族の方にお話ししなければならないことになる。

続いて一言。現在の中央図書館には貴重書庫があり、江戸時代からの大事な図書を置いている。この部屋は特別あつらえて、通常は常温常湿となっている。火災が発生した場合は、熱と煙を感知したセンサーが二酸化炭素を噴出することになる。これが普通のスプリンクラーで水を噴射すれば大事な図書は絶滅である。もし火災のとき貴重書庫の中に図書館員がいたら生きて出てこれないことになるかもしれない。何を言わんとするか。人間より図書が大事ということであ

る。人間の代りはいるが、大事な図書は二度と甦らない。ちょっと怖い話になりました。

別の話を一言。「情報」という言葉が最初に使われたのは、森鷗外が翻訳した「クラウゼヴィッツの『戦争論』」が始まりということである。「情けに報いる」と書いて「情報」。さすが森鷗外である。近年「情報」という言葉があまりにも軽々しく使われすぎて、本来の重みが薄くなっている。やはり、インターネットなるネットワークが世界中に張り巡らされてからのことである。少し情けをかけて「情報」は使いたいものである。

世間ではこのインターネットを使つての商売が繁盛している。これまで図書館では紙媒体の雑誌を買っていたが、ここ数年は電子ジャーナルとしてインターネットを介して読むことができるようになった。この電子ジャーナルは出版社側のサーバにアクセスして利用する。利用契約するだけなので、図書館には何も残らない。利用者にとっては非常に便利になったように見えるが、私のような古い図書館員としては何か複雑なものがある。もしも出版社が倒産したらどうしよう。電子ジャーナルサイトのサーバがこけたらどうしよう。ただの杞憂であつたらよいのだが。

最後に一言。「図書館員は、うわついた情報の下僕ではなく、知の伝承者としての誇りを忘れることなく、**本がいのち**」と知るべし。

やはり、説教がましくなりました。

(もりぞの ひさし:情報管理課 課長代理)

## 研修報告

## 平成18年度 総合目録データベース実務研修

日時：平成18年9月25日～10月6日

場所：国立情報学研究所

宮里 昌代

平成18年9月25日～10月6日までの2週間、国立情報学研究所にて開催された総合目録データベース実務者研修に参加する機会をいただきました。

この研修は、同研究所がNACSIS-CAT/ILL参加機関の目録業務担当者を対象として毎年開催しているもので、各参加館において中心的役割を担うと共に、目録システム講習会では講師となる人材の育成を目的としています。今年度は全国の国・私立大学図書館職員16名が参加しました。

研修では、NACSIS-CAT/ILLの概論や目録規則改訂等の講義に加え、大学図書館の目録業務で近年増えつつあるアウトソーシングや、文献を電子的に配布するDDS(ドキュメント・デリバリー・サービス)についての事例報告もあり、幅広い内容の話を聞くことが出来ました。

また、個人やグループで取り組む演習もあり、他大学で同じ目録業務に携わっている方々との意見交換が出来たことも大変有意義でした。

その他、NACSIS-CAT参照マークのひとつ、TRC/MARCを作成するTRC図書館流通センターの見学等、興味深いものもあり、とても充実した2週間でした。

この研修を通して、目録業務に関する専門的な知識や、参加館としての共同意識の再確認、講師として講習会に参加する際に当たってのプレゼンテーションの技術等、多くのことを学ばせていただきました。また、講師の方々や、研修生として参加された他大学の図書館職員の方々との交流によって得られたものも沢山ありました。今後、それらを大いに活かしていきたいと思っております。

(みやざと まさよ:情報管理課 学術コンテンツ係)

## 本学関係者著作寄贈図書

附属図書館では、本学関係者の著作を収集しています。  
 著作刊行の際は、ご寄贈くださるようお願いいたします。  
 今回は、次の方々から著作をご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。

### 中央図書館

寄贈者	寄贈図書
中河 志朗 (医歯学総合研究科教授)	人体の構造と働き:人体の基本的な構造・機能の理解をめざして / 中河志朗[著] [鹿児島]: [鹿児島大学大学院医歯学総合研究科], [2004]
小池 保夫 (知的財産本部教授)	ハイブリッドICとその応用: 製法から応用システムまで / 宇佐美晶 [ほか] 共著 東京: パワー社, 1989.6
馬田 英隆 (農学部演習林教授)	鹿児島大学植物園の樹木たち / 鹿児島大学「鹿児島大学植物園の樹木たち」編集委員会著 鹿児島: 鹿児島大学「鹿児島大学植物園の樹木たち」編集委員会, 2004.3
井村 隆介 (理学部助教授)	霧島火山の生い立ち / 井村隆介著 鹿児島: 徳田屋書店, 2004
川上 正之 (理学部教授)	カラーで見る不思議な衛星の軌道 / 川上正之著 京都: 松香堂, 2005.2
北村 浩一 (法文学部助教授)	管理会計の国際的展開 / 西村明, 大下丈平編 福岡: 九州大学出版会, 2003.10
西川 匡英 (農学部教授)	現代森林計画学入門: 21世紀に向けた森林管理 / 西川匡英著 東京: 森林計画学会出版局, 2004.10
藤内 哲也 (法文学部助教授)	近世ヴェネツィアの権力と社会: 「平穏なる共和国」の虚像と実像 / 藤内哲也著 京都: 昭和堂, 2005.2
原口 泉, 丹羽 謙治 (法文学部教授、助教授)	薩摩藩文化官僚の幕末・明治: 木脇啓四郎『萬留』: 翻刻と注釈 / [木脇啓四郎著]; 原口泉 [ほか] 共編 東京: 岩田書院, 2005.2
寺岡 行雄 (農学部助教授)	森林組織計画 / 今田盛生編著 福岡: 九州大学出版会, 2005.3
山田 誠 (法文学部教授)	奄美の多層圏域と離島政策: 島嶼圏市町村分析のフレームワーク / 山田誠編著 福岡: 九州大学出版会, 2005.7
神田 嘉延 (教育学部教授)	暮らしと民主主義の大学創造: 地方大学と生涯学習 / 神田嘉延著 東京: 高文堂出版社, 2005.7
三輪 伸春 (法文学部教授)	英語史でわかるイギリスの地名: 地名で楽しむイギリスの歴史, 文化, 言語 / C.S. デイヴィス, J. レヴィット著; 福元広二, 松元浩一訳 東京: 英光社, 2005.6
三輪 伸春 (法文学部教授)	シェイクスピアの英語 / G.L. ブルック著; 三輪伸春, 佐藤哲三, 濱崎孔一郎ほか訳 東京: 松柏社, 2000.10
三輪 伸春 (法文学部教授)	シェイクスピアの英語 / G.L. ブルック著; 三輪伸春, 佐藤哲三, 濱崎孔一郎ほか訳 東京: 松柏社, 2005.9
染川 賢一 (工学部教授)	パソコンで考える量子化学の基礎 / 時田澄男, 染川賢一共著 東京: 裳華房, 2005.9
川上 正之 (理学部教授)	パソコンでこまを回す / 川上正之著 東京: 近代文芸社, 2005.12
篠原 勝次 (工学部教授)	演習ベクトル制御と交流機駆動の動力学 / 篠原勝次, 飯盛憲一, 山本吉朗共著 東京: 電気書院, 2005.12
杉本 和弘 (教育センター助教授)	戦後オーストラリアの高等教育改革研究 / 杉本和弘著 東京: 東信堂, 2003.12
鈴木 英治 (理学部教授)	Plants on Gn. Halimun National Park around Cikaniki and loop trail / by Eiji Suzuki Japan: JICA 2002.4

## 中央図書館(2)

寄贈者	寄贈図書
鈴木 英治 (理学部教授)	Tumbuhan di sekitar Cikaniki dan Loop-trail Taman Nasional Gn. Halimun / oleh, Eizi Suzuki Japan : JICA 2002.4
高橋 武重 (工学部教授)	工業触媒：技術革新を生む触媒 / 西村陽一, 高橋武重共著 東京：培風館, 2002.9
丹羽 謙治 (法文学部助教授)	薩摩藩絵師中島信徴没後百年記念誌 / 中島正國編 鹿児島：南方新社, 2006.1
仲村 政文 (名誉教授)	地域ルネッサンスとネットワーク / 仲村政文, 蔦川正義, 伊東維年編著 京都：ミネルヴァ書房, 2005.3
竹岡 健一 (法文学部教授)	ヘルマン・ヘッセ全集 / ヘルマン・ヘッセ [著]; 日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会編・訳 京都：臨川書店, 2005.4
菊川 浩行 (水産学部教授)	蜻蛉とすてきな仲間たち / 菊川蜻水著 東京：日本写真企画, 2005.12
菊川 浩行 (水産学部教授)	小さな仲間たち / 菊川蜻水著 東京：日本写真企画, 1999.12
池川 直 (教育学部教授)	彫刻伝説の島 / 池川直著 東京：東洋館出版社, 2005.3
池川 直 (教育学部教授)	現代日本の彫刻 / ARTBOXインターナショナル出版編集部企画・編集 東京：ARTBOXインターナショナル, 2005.5
松永 安光 (工学部教授)	まちづくりの新潮流：コンパクトシティ/ニューアーバニズム/アーバンビレッジ / 松永安光著 東京：彰国社, 2005.9
宮本 旬子 (理学助教授)	クロモソーム植物染色体研究の方法 / 福井希一, 向井康比己, 谷口研至編著 東京：養賢堂, 2006.3
木部 暢子 (法文学部教授)	コミュニケーションのかたち：ことば・もの・メディア / 木部暢子編 鹿児島：鹿児島大学, 2004.3
仙波 伊知郎 (歯学部教授)	遙かなる天空の村で：ネパール歯科医療協力活動17年間の記録 / 中村修一編集；奥野真人構成 東京：草風館, 2006.5
福井 泰好 (工学部教授)	入門信頼性工学：確率・統計の信頼性への適用 / 福井泰好著 東京：森北出版, 2006.7
相場 慎一郎 (理学部助手)	森林の生態学：長期大規模研究からみえるもの / 種生物学会編；正木隆, 田中浩, 柴田銃江責任編集 東京：文一総合出版, 2006.3
大塚 定徳 (名誉教授)	イギリス・ルネサンス恋愛詩集 / 大塚定徳, 村里好俊訳 大阪：大阪教育図書, 2006.5
岡本 嘉六 (農学部教授)	獣医師のためのHACCP手法研修用教材 / [日本獣医師会編] 東京：日本獣医師会, 2004.9
細川 道久 (法文学部教授)	パクス・ブリタニカとイギリス帝国 / 秋田茂編著 京都：ミネルヴァ書房, 2004.5
細川 道久 (法文学部教授)	虚飾の帝国：オリエンタリズムからオーナメンタリズムへ / D. キャナダイン著；平田雅博, 細川道久訳 東京：日本経済評論社, 2004.5
細川 道久 (法文学部教授)	史料が語るカナダ：ジャック・カルチエから冷戦後の外交まで：1535-1995 / 日本カナダ学会編 東京：有斐閣, 1997.9

## 中央図書館(3)

寄贈者	寄贈図書
細川 道久 (法文学部教授)	白人とは何か?: ホワイトネス・スタディーズ入門 / 藤川隆男編 東京: 刀水書房, 2005.10
細川 道久 (法文学部教授)	カナダ史 / 木村和男編 東京: 山川出版社, 1999.7
細川 道久 (法文学部教授)	カナダを知るための60章 / 綾部恒雄, 飯野正子編著 東京: 明石書店, 2003.1
細川 道久 (法文学部教授)	いま歴史とは何か / D・キャナダイン編著; 平田雅博 [ほか] 訳 京都: ミネルヴァ書房, 2005.5
本村 浩之 (総合研究博物館 助教授)	Threadfins of the world (family Polynemidae) : An annotated and illustrated catalogue of polynemid species known to date / by Hiroyuki Motomura Rome : FAO, 2004
北村 浩一 (法文学部助教授)	J.O.マッキンゼーの予算統制論 / 北村浩一著 東京: 中央経済社, 2006.9
高津 孝 (法文学部教授)	四明経籍志 / 張壽鏞編輯  si ming jing ji zhi [東アジア海域交流]総括班 2006.3

## 桜ヶ丘分館

寄贈者	寄贈図書
西菌 秀嗣 (医学部非常勤講師)	スポーツ選手と指導者のための体力・運動能力測定法: トレーニング科学の活用テク 東京: 大修館書店, 2004.4
中河 志朗 (医学部教授)	人体の構造と働き: 人体の基本的な構造・機能の理解をめざして / 中河志朗[著] [鹿児島]: [鹿児島大学大学院医歯学総合研究科], [2004]
乾 明夫 (医学部教授)	Epigenetic risks of cloning / edited by Akio Inui Boca Raton, FL : Taylor & Francis, 2006
平 明 (名誉教授)	死の周辺学: 一外科医の目からみて / 平明著 福岡: 丸善福岡出版サービスセンター, 2005.12
桑原 司 (法文学部助教授)	初期シカゴ学派の世界: 思想・モノグラフ・社会的背景 / 宝月誠, 吉原直樹編 東京: 恒星社厚生閣, 2004.3
前田 芳實 (農学部教授)	遺伝資源が結ぶ南九州とアジア 鹿児島: 鹿児島大学遺伝資源研究プロジェクト, 2006.3
和泉 雄一 (歯学部教授)	歯周病と全身疾患: これで大丈夫!患者さんへの情報発信 / 野口俊英編著 東京: ヒョーロン・パブリッシャーズ, 2006.5
仙波 伊知郎 (歯学部教授)	遙かなる天空の村で: ネパール歯科医療協力活動17年間の記録 / 中村修一編集; 奥 東京: 草風館, 2006.5
後藤 正道 (医学部助教授)	ハンセン病アトラス: 診断のための指針 / 小野友道, 尾崎元昭, 石井則久責任編集; 日 東京: 金原出版, 2006.5
乾 明夫 (医学部教授)	Cachexia and wasting a modern approach / Giovanni Mantovani (ed.) Berlin : Springer, c2006.

## 水産学部分館

寄贈者	寄贈図書
菊川 浩行 (水産学部教授)	蜻蛉とすてきな仲間たち / 菊川蜻水著 東京: 日本写真企画, 2005.12
菊川 浩行 (水産学部教授)	小さな仲間たち / 菊川蜻水著 東京: 日本写真企画, 1999.12
鈴木 廣志 (水産学部教授)	天草の渚: 浅海性ベントスの生態学 / 菊池泰二編 秦野: 東海大学出版会, 2006.1

## 夏休み子ども見学デー開催

鹿児島大学附属図書館では、各府省庁等の「子ども夏休み見学デー」に呼応して、「夏休み子ども見学デー：大学図書館ってどんなところ？」を8月23日に開催した。大学図書館で親子が一緒になって「夏休みの自由研究や体験学習」の機会にしてもらう目的で企画した結果、小学生と保護者を単位とする14グループ37名の参加があった。

第1ステージの館内見学では、大量の専門図書や国内外の学術雑誌、江戸時代の「古文書」を見学し、第2ステージの図書館体験スタンプラリーでは、鹿児島の歴史や文化の問題、図書や雑誌を使って解く問題、パソコンを使って図書館の本を探す問題等に図書館職員の助言を受けながらチャレンジした。問題を解いたグループは、スタンプをもらってパスポートに貼ることができ、次々に問題に挑戦するグループなどもあって、大変盛況であった。

参加者からは、「普段利用することがないので、大学図書館が身近なものとなった。」「今まで触れたことのない本に触れる良い機会になり、自然と調べ学習の方法が学べた。」等の感想が寄せられた。

最後に、夏休み子ども見学デーの全コースを修了したことを証して、早川附属図書館長から子どもたち全員に修了証書が手渡された。



古文書を見学する子どもたち

## ニュース&ピックス③

ご利用ください

### 新入生対象「図書館ガイダンス」

附属図書館では4月～6月まで新入生を対象とした図書館ガイダンスを実施しています。

出来るだけ多くの学生に早くから図書館の効果的な活用方法を知ってもらい、これからの情報収集やレポート作成等の学習活動に役立てていただきたいと思います。

館内ツアーでは施設を案内しながら図書館の利用法や資料の配置について説明します。

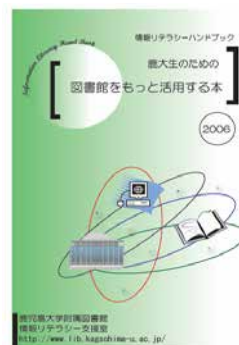
図書館ホームページの利用方法や図書や雑誌の探し方(蔵書検索：鹿大OPAC)も紹介します。

特に、1年生を担当する教員の皆様、ぜひご利用ください。その他グループやゼミ単位での文献検索法などのガイダンスもご要望により随時開催しています。

また、「鹿大生のための図書館をもっと活用する本2006—情報リテラシーハンドブック」を刊行し、蔵書検索や論文検索、その他学術情報を収集する方法などを紹介した情報検索ガイドも準備しています。

#### 申し込み方法

図書館カウンターまたは図書館ホームページ学習研究サポートの「参加申込書」により受け付けています。



**中央図書館** 099-285-7440 sanko@lib.~  
(~に kagoshima-u.ac.jp を入れる)

**桜ヶ丘分館** 099-275-5205 sakura@lib.~

**水産学部分館** 099-286-4051 suisan@lib.~

#### 編集後記

経費削減の折から、印刷発注しないことになりました。金額に影響しないので、カラーをふんだんに使える分、ケバ過ぎないか苦心しました。PDF作成についても、高解像度に

するとファイルが大きくなり、ネットに載せるのがはばかれるし、落とせば薄汚くなり、いかにも安っぽく見える。印刷される方に用紙や解像度を配慮していただきたいと思います。タイトルページは編集者の趣味に任せ、毎号変化します。

## 南風：鹿児島大学図書館報 No. 62

2007年 2月 発行

編集・発行 鹿児島大学附属図書館

〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21-35

TEL：099-285-7440

E-mail：sanko@lib.kagoshima-u.ac.jp

URL：http://www.lib.kagoshima-u.ac.jp/